

● 茅ヶ崎市美術館へ行ってきました。(2024.11.4 田淵様より)

茅ヶ崎駅から昭和ムード満点の飲み屋街を抜けて図書館まではすぐに行けたのですが、美術館は庭園の中にあったので、見つけるのに少々手間取りました。展示はみなと博物館収蔵品の他、大阪市立中央図書館や個人蔵のものもあり、よい機会となりました。庭園の中には、カトリック詩人の八木重吉の碑がありました。終焉の地が茅ヶ崎だった由。庭園の向かいにはカトリック茅ヶ崎教会があります。



茅ヶ崎駅前の盛り場



カトリック茅ヶ崎教会



八木重吉碑 (カトリック詩人 1898~1927)

● 柳原良平グッズ「ウイスキーボトル」 (2024. 11. 3 小杉様より)



● 今年最後の初入港客船「リビエラ」 (2024. 10. 28入港) (2024. 11. 4 石川様より)





【柳原良平と私】⑩

柳原良平先生との思い出

佐藤正二

横浜港振興協会の機関誌の表紙を飾るは、当時柳原良平先生の船を描いた絵でした。発行された機関誌はいつも読んで居りました。又テレビに出て来るトリスウィスキーのコマーシャルでお馴染みのアンクルおじさんは顔が大きく独特な描き方は強烈な先生のイメージを感じたものです。又描く船にアンクル船長の顔が描かれるのも先生らしい特徴が可愛らしく愉快的気持ちにさせてくれるものでした。柳原良平先生は山下町にあるシャンソニエへ足を運び、私同様シャンソンを聴くのが大好きな人でした。先生の毎年関内で開催する展示会には、フェリス女学院の卒業生数人（シャンソニエの経営者はフェリス女学院の元事務局の人）と元外国航路の船員だった私を先生の作品の説明役に仕立てられ、船を知る私を誘って一緒に展示会へ出向き絵を説明する私に「今度展示会にはお手伝いをお願いしたい」などと冗談を言う方でした。シャンソン仲間だった私は展示会に行く時に炊き込みご飯をつくりお土産に食べて貰う様持参すると、お礼に大きな客船を象るクッキーを奥様から頂いたものです。先生の作品である絵本に直接サインペンで海賊を描いてくれた時の事を思い出します。船会社（商船三井グループ）を退職して船員とその家族の福利厚生施設を運営する日本船員厚生協会に就職して転勤もありましたが、横浜勤務が長かったので“帆船日本丸友の会”に入会していろいろなイベントや活動でボランティアを長い間帆船日本丸で行い、柳原良平先生にもお会いすることが出来ました。私も来年満80歳を迎えます。シルバー人材センターの会員として就業しており、休憩時には今でも柳原良平先生の絵が描かれたマグカップを愛用しております。商船三井客船のつぼん丸が横浜大棧橋から“若大将クルーズ”に出港する時、柳原良平先生と一緒に見送った時の事をマグカップのボートに乗った丸い目の船長姿の絵を見ると懐かしく思い出し、こんな時を過ごした横浜へまた行きたいと思っております。

【柳原良平と私】⑪

ファンになりました

土信田英子

昭和30年代、横浜駅西口名品街の地下に「サントリーラウンジ」がありました。30分毎にピアノの演奏があり、20代の女子数名で1本のビールを空けるのに四苦八苦。でも私の目当てはPR誌「ビール天国」「サントリー天国」を貰うことでした。ハッとするような表紙が好きで、作者である先生のお名前を知りました。船が好きで「船の本」を買い、内航3泊4日乗船した大阪商船移民船「ぶらじる丸」を画いていただきました。「横浜市民と港を結びつける会」にいそいそと入会、そして「友の会」へ。船を通してつつみ込む様な先生の話と笑顔がいつもマッチしていました。先生と沢山の人の出会いは私の宝ものです。アートミュージアムに入館時はいつも笑顔の写真の先生に手を振っています。ありがとうございます。

【柳原良平と私】⑫

柳原良平先生の思い出

関 雅夫

柳原良平先生とは日本丸友の会の幹事会や友の会のパーティー・講座・個展その他数々の機会での思い出が数多くありますが、中でも著書に書かれておられた横須賀鎮守府所属の戦艦山城について記憶に残っていることを書かせていただきます。柳原良平先生は友人に海軍艦艇の大好きな友人がおられて海軍艦艇のほうから船にご興味をひかれたとのこと。様々な海軍艦艇の絵も描かれておられたとのことで、戦艦山城については30ノットも出る高速戦艦金剛級のように速力が出るわけではなく（戦艦山城は24.7ノット・戦艦大和は27ノット、1ノットは時速1.852キロメートル）戦艦扶桑の姉妹艦で超弩級戦艦ではあるものの地味な戦艦だと書かれてありました。（山城・扶桑 両戦艦ともどもレイテ沖海戦の一つのスリガオ海峡夜戦で戦没しました。戦艦山城は司令官 西村中将座上の旗艦として最後まで一番砲塔が火を噴きつつ沈没したそう

です。)海軍艦艇から船の世界に入られたの事ですがその後のご活躍は皆様のご存じの通りです。長くなりますので最後に戦艦山城が所属していた横須賀鎮守府 横鎮の歌をご紹介します。横鎮の歌。一、勇ましく、出港う 用意のラッパが響きや 何の未練ものこしやせぬ 水漬く屍と此の身を捨て 今ぞ 乗り出す 太平洋 二、住なれし母港よ さらばと見返る空に 浮かぶ、三浦の山や丘か 椿き咲くかよ、あの大島を 越せば黒潮を渦を巻く 三、緑なす山の陰さえ 見ぬ幾月ぞ 今日は母港え横須賀へ まねく、はた山錨を下しや 見えて懐かし、あの波止場

【柳原良平と私】⑬

『良平のヨコハマ案内』との出会い

奥津憲聖

私が柳原良平先生を知ったきっかけは大学1年生の時に読んだ『良平のヨコハマ案内』です。横浜生まれの私にとって柳原先生のイラストは小さい頃からなじみ深いものでしたが、同書とその前作の『みなと横浜片思い』を読み、柳原先生が帆船日本丸の誘致やみなとみらい21の愛称選考など、横浜のまちづくりに深く関わっていたことを初めて知りました。建築家や都市計画の専門家ではなく、柳原先生のようなデザイナーがまちづくりに関わった事例が面白いと感じた私は「グラフィックデザイナーによる横浜のまちづくり」をテーマに卒業論文を執筆しました。2014～15年に、せんたあ画廊の個展にお邪魔し、先生をお見かけする機会もありましたが、ご体調を崩されている様子で、遠慮して話しかけることはできませんでした。その後、私は大学院の修士課程を修了し、横浜みなと博物館の学芸員となりました。柳原先生と直接お話しすることは叶いませんでしたが、私の就職後に柳原良平アートミュージアムがオープンし、特集展示という形で先生のご作品をご紹介します機会に恵まれました。先生のご著書との出会いが今の私につながっていると感じており、先生には大変感謝しております。